

# Reflection 1

ICIS Newsletter, Kansai University



## Contents

学長挨拶	2
開所式挨拶	3
拠点概要	4
拠点組織図	5
メンバー構成	5
中日文化交渉史の初歩的観察	6
第1回国際シンポジウム 文化交渉学の可能性を考える	8
活動報告	12
お知らせ・編集後記	15

# ICIS

文部科学省グローバルCOE  
関西大学文化交渉学教育研究拠点

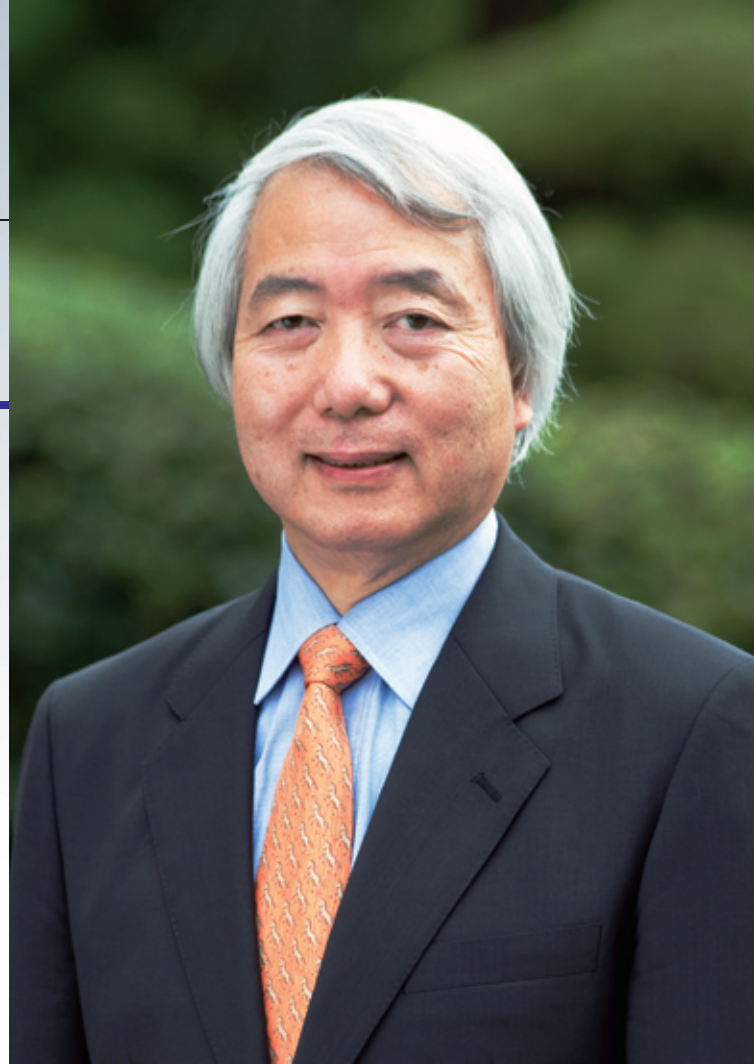
Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University

# 学長挨拶

関西大学学長

河田 悳一

KAWATA Teiichi



平成19年度（2007年）のグローバルCOEプログラムに、関西大学から申請していましたプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」が、人文科学分野で採択されました。募集のあった5分野で採択された大学の数に28校、そのうち私立大学はわずかに4校のみでした。

私は、中国思想史を研究して40年になります。日本でも数少ない、中国・アジアの研究を専門とする学長であります。それだけに、このたび私どものプログラムが長期にわたる構想と多くの方々的一致協力のもと、厳しい審査をへて採択されたことは、関西大学にとっての「快挙」であるばかりではなく、私自身にとりましても、身のひきしまる「快事」であります。

今回のグローバルCOEでは、グローバルな

舞台で活躍できる人材、世界をリードする創造的な人材を育成して、国際競争力のある大学づくりを推進することが、最大の目的とされています。まさに本プログラムは、こうした大きなビジョンにもとづいて、綿密に打ち立てられた一大事業であります。

これまでの関西大学東西学術研究所とアジア文化交流研究センターにおける長年にわたる教育の成果と研究の蓄積に依拠しつつ、関西大学ならではの特色あふれるグローバルCOEプログラム拠点から21世紀の世界に大きくはばたく、有用な人材を育成していく所存です。今後、学長として全力を尽す覚悟でありますので、どうぞ温かいご支援と大きな期待を賜りたく存じます。



## 開所式挨拶

関西大学文化交渉学教育研究拠点リーダー

# 陶 徳 民

## TAO Demin

本日、人文学のノーベル賞ともいうべき Kluge Prizeの2006年度受賞者である余英時プリンストン大学名誉教授をはじめ、台湾中央研究院、上海復旦大学、北京外国語大学、華中師範大学、香港城市大学、シンガポール国立大学、韓国外語大学校、ローマ大学、エアランゲン大学、東京大学、京都大学、大阪大学および二松学舎大学のご来賓の皆様をお迎えして関西大学文化交渉学教育研究拠点の開所式を挙げることは誠に光栄でございます。関西大学は内藤湖南文庫・増田渉文庫など近代日中文化交渉史に大きな足跡を残した人物のコレクションを有するだけでなく、1986年度日本学士院賞を受賞された故大庭脩教授の『江戸時代における中国文化受容の研究』など優れた研究実績を多く

積んでおります。このような豊富な研究リソースを生かし、また内外の研究機関と緊密に連携して努力すれば、本拠点は必ずや文化交渉学の探求と若手研究者の育成という両面において成功を取めることができるだろうと思います。



## ❖ 拠点概要

### ● 拠点形成の目的

本拠点は、日中交流史を中心とする本学の特色ある研究実績を十分に踏まえながら、新しい学問分野としての「文化交渉学」を構築し、その手法を身につけた若手研究者の育成を進めることをめざしている。本拠点の活動目的は、以下の3点に集約される。

- ① 東アジア世界を多対多関係の織りなす文化的複合体として捉える複眼的視座を共有し、国際的発信力を持つ自立した若手研究者を育成する。
- ② 従来の二国間関係あるいは学問分野別の文化交流研究を越えて、新たな学問分野としての「文化交渉学」を創出し、その理論と方法、具体的事例研究をする。
- ③ 各国で個別に行われている文化交流研究・対外関係史研究などを国際的ネットワークで結びつけ、東アジア各地域の文化研究をリードし、「国際学会」を有する研究ハブを構築する。

### ● 拠点組織

人材養成組織として、本学大学院文学研究科を改組し、「文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専修」を平成20年4月に新設する。また研究活動を含めたグローバルCOEプログラムの実施組織として、全ての事業推進担当者および支援スタッフ（客員教授・助教・特別研究員・DAC・PD・RA）が所属する「文化交渉学教育研究拠点」を設立する。同時に学内関係部局が一体となった支援体制を構築するために、学長を議長とする「グローバルCOE運営協議会」を立ち上げ、諸事項の決定と全学的調整を迅速に行うとともに、プログラムの進捗を管理し、必要な助言を行う。

### ● 人材養成プログラム

#### ■ 多言語による発信力を持つ若手研究者の養成

国際的発信力の乏しさという我が国の人文学研究がかかえる弱点を克服するため、母国語も含めて複数言語での情報発信能力の習得を必須とする。文化交渉学専攻では、英語+2アジア言語（中国語・朝鮮語・日本語）をアカデミックな情報発信のための言語として想定し、学会発表・論文執筆を念頭に置いたスキルアップのための少人数クラスを開設する。

#### ■ 国際的リーダーシップを発揮できる若手研究者の養成

自らの研究課題を独力で探求するだけでなく、関連する研究者を組織して研究プロジェクトを企画・主導し、国際的ネットワークを形成して、リーダーシップを発揮できるような人材を養成するため、若手研究者による同世代国際学術フォーラムを毎年開催する。同フォーラムには、海外の同世代の研究者たちが集い、その成果はフォーラム紀要として刊行される。

#### ■ 複眼的アプローチを身につけた若手研究者の養成

文化交渉学専攻に入学する学生は、人文学のそれぞれの学

問分野のもとで教育を受けてくる。同時に文化交渉学専攻では、上述のように、ナショナルな研究枠組みと学問分野別の研究枠組みの両方からの越境が求められるが、これは矛盾するものではない。コアとなる研究分野を確立し、かつそこに安住することなく、意識的越境と他分野との接触によって拓ける可能性を自覚することが、本専攻の若手研究者に期待する複眼的アプローチである。

### ● 研究活動

我々が構築しようとする文化交渉学とは、国家や民族という分析単位を超えて、東アジアという一定のまとまりを持つ文化複合体を想定し、その内部での文化生成、伝播、接触、変容等の諸現象に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとする新しい学問研究である。それゆえ、方法論の構築と研究活動全般の統括のため拠点メンバー全員が「文化交渉学創生部会」を構成し、その下に研究班として4地域研究班が置かれる。

#### ■ 二つの越境

従来の文化交流研究は、主として言語、思想、民族、宗教、文学、歴史など学問分野ごとの事例研究の積み重ねとして形成されてきた。また従来は、国家単位のナショナルな研究枠組が前提となり、例えば日中文化交流研究においては、個別の研究は日本と中国のナショナルな枠組にそれぞれ拘束されてきた。

文化交渉学は、このような文化交流研究の成果をふまえながら、それをより高次元な学問研究へと飛躍させるために用意された場である。研究方法としては、文化的中心を固定的に設定することは避け、また一国一地域の文化を他者から切り離して孤立的に探求する方法も採らない。多対多関係の中で東アジアをとらえ、絶えざる文化接触の連鎖の結果として構築された文化的複合体としての東アジア文化を措定し、人文学のさまざまな観点を組み込みながら分析しなおすことが、東アジアを対象とする文化交渉学に求められる役割である。

#### ■ 研究の結節点

国別の研究枠組みと学問分野別の研究枠組みの両者を越境し、多様な文化交渉の事象を包括する幅広い研究軸として、本拠点では以下の3つの研究軸を想定している。

##### ① 媒介から見た文化交渉の諸相

個人や集団としての「人」、典籍や交易産品のような「モノ」、さらに船舶などの交通手段、交易路、それを規定する国際関係など、研究対象は広範である。本拠点では、それぞれの専門領域からこれらを個別に取り上げるだけでなく、「東アジア」という大きな場への止揚に留意しつつ、研究を進める。

##### ② 地域における文化接触とその影響

東アジアのなかにある特定の地域を設定し、その地域における文化交渉を他地域との比較を念頭に置きながら研究する。「北東アジア」「沿海アジア」「内陸アジア」「アジア域外」の4地域研究班を置き、中国文化とどのような関係を取り結んだかを当面の共通課題とし、次いで各

地域文化の東アジア全体における位置を共同研究する。

### ③他者から見た文化像と文化アイデンティティの形成

自画像と他者の手による肖像のギャップ、そして他者の自己認識が自らの文化的アイデンティティ形成とどのように関係するかを扱う。異文化接触を考える際に必ず表面化する問題であり、文化的複合体として東アジアを捉えようとする本プログラムにも必須の視点である。

### ■情報発信

研究成果を発信する紀要、日常的活動報告であるニューズレターは日本語のみならず、英語・中国語など多言語による発信を行う。また拠点の活動、専攻の内容を紹介するホームページ (<http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>) も、日・英・中(繁体字・簡体字)・韓の各バージョンを用意し、世界の研究者の利用に供するデータベースを構築・公開する。

## ◆拠点組織図



## ◆メンバー構成

### 拠点リーダー

陶 徳民

### 拠点サブリーダー

内田 慶市 アジア域外班 (主幹)  
藤田 高夫 内陸アジア班 (主幹)

### 事業推進担当者

吾妻 重二 北東アジア班 (主幹)  
藪田 貫 北東アジア班  
原田 正俊 北東アジア班  
増田 周子 北東アジア班  
二階堂善弘 沿海アジア班 (主幹)  
松浦 章 沿海アジア班  
野間 晴雄 沿海アジア班  
熊野 建 沿海アジア班  
高橋 誠一 沿海アジア班  
伏見 英俊 内陸アジア班  
小田 淑子 アジア域外班  
沈 国威 アジア域外班

### COE助教

西村 昌也

### COE特別研究員

佐藤 実

### COE-DAC (デジタル・アーカイブズ・キュレーター)

氷野 善寛

### COE-PD (ポスト・ドクトラル・フェロー)

木村 自  
岡本 弘道

### COE-RA (リサーチ・アシスタント)

大槻 暢子  
宮嶋 純子  
陳 贊

(2008年1月現在)

# 中日文化交渉史の初歩的観察



2007年10月4日（木）、余英時プリンストン大学名誉教授に、関西大学名誉博士号が授与された。関西大学名誉博士号は、学術・文化・人類の進化にとって多大な貢献をした人物に贈呈される。周知のように、余英時教授は、2006年に人文学のノーベル賞とも称されるJohn W. Kluge賞を授与されている。関西大学におけるグローバルCOEプログラムの採択を機に、余英時教授に名誉博士号を贈呈し、また同時に記念講演を頂戴できたことは、今後のプログラムの発展に大きな意味を持つであろう。

## 余英時教授—名誉博士号授与記念講演

この度は、関西大学より名誉博士号をいただき、心より感謝申し上げます。

この場をお借りして「文化交渉学」が文明に関する一般思潮において、どのような位置づけにあるのかについて考察をしたいと思います。1996年、ハンチントンが『文明の衝突』を世に問いましたが、氏の論調や論拠の最重要部分はアーノルド・トインビーの研究成果に基づいております。ここで「文化交渉学」という角度から、トインビーの著書『歴史の研究』における三つのポイントを指摘しておきたいと考えます。第1に、意識的に西洋文化中心論の落とし穴から脱却し、歴史上のあらゆる

文明を平等な立場で取り扱う試みを行った点です。第2に、トインビーは「文明」を研究の基本単位とすべきであるという考えを初めて正式に提示した歴史学者でした。第3に、史学はもとより総合的な学問であり、人文社会科学の各分野の如何なる研究方法、研究業績をも歴史学者は借用するということです。『回想録』においてトインビーは、諸科学の同時並行的な発展を目指すという多元的傾向を強調すると同時に、既存の学科間の壁を打ち破り、学際的相互理解を図るよう主張しています。以上から、「文化交渉学」の分野では、トインビーが先駆的な存在と



余英時 Yu Ying-shih  
プリンストン大学名誉教授。1930年生まれ。ハーバード大学でPhDを取得後、ハーバード大学教授、香港新亜書院校長、エール大学教授などを歴任し、現職。2006年にJohn W. Kluge賞を受賞した。『士与中国文化』『中国近代思想史的胡適』『中国近世宗教倫理与商人精神』など多数の著書がある。

言えましょう。

さて、一般の文化交渉学から東アジア地域、特に中国と日本との間で行われた文化交渉について論じることにします。

かつて『漢代の貿易と拡張』（英文、1967年）という書物を執筆するにあたって、日本古代（倭国）と中国の貿易交渉について調べたことがあります。私は漢魏以降の日中交渉史に関しては足を踏み入れたことはありませんが、きわめて重要な問題を取り上げつつ、ごく初歩的な見方を述べていきたいと思います。

私にとっての素朴な問題は「東アジア文化」あるいは「東アジア文明」という包括的概念の下で、中国と日本との関係をどう理解するべきかということにあります。この問題はトインビーによって最初に提示されたものであります。彼は東アジアを論ずる際に、「中国古代文明」「極東文明」という二つの歴史的段階を設定しました。そして「極東文明」を、「本幹」としての中国、また「分枝」としての日本の二つに分けて論じています。

その後、「文明の衝突」を書いたハンチントン氏は「極東文明」という概念を打ち捨て、日本と中国とを截然と区別される二つの文明として扱うに至りました。こうした両者の観察について一般的な歴史事実を挙げて説明させていただきたいと思います。

まず日本は文明、社会そして国家といういずれの角度から見ても、基本的には中国の朝貢体制に組み込まれていなかったことを指摘しておきたい、と考えます。つぎに中国文化の日本に与えた影響については、中国文化が先に発展し、日本に大きな影響を与えてい

ることは疑いのない事実です。しかし、一方で日本は中国文化の個々の部分を大量に取り入れながら、日本社会の需要に応じて巧みに中国文化そのものを再編成しています。その結果、オリジナルな日本文明を作り上げるに至ったのです。その最も象徴的な実例は何でしょうか。それはほかならぬ日本の文字言語であります。思想、宗教、芸術、社会組織についても同様です。つまり18世紀まで、日本は中国文化の個別要素を無数に借用してきましたが、最終的に形成されたのは中国文化と異なった日本文化でありました。

最後に、明治維新以降の中日間の文化交渉について触れ、講演を締めくくりにいたします。

中日文化交流史は明治維新を分水嶺に二つの時期に分けることができると思います。明治維新以前は、日本が長期にわたって中国の文化資源を借用しつつ独自の文明を築き上げてきました。しかし明治維新以降はその状況が逆転し、西洋の侵略に対応できる日本文明について、中国は認識を新たにします。だが日本は西洋の近代的武力拡張の精神を借用し、中国をその対象としたため、長期間にわたって中日両国の間には文化交流を展開することができなくなっていたのであります。

過去1世紀あまりの間、日本も中国も対話の中心を西洋に置き、中・日間の文明の対話はおろそかにされてきました。そして今回、うれしいことに、あたかもこの分野の学術的空白を埋めるかのように、関西大学の「東アジア文化交渉学教育拠点」が成立いたしました。最後に、文化交渉学の教育研究事業の成功をお祈り申し上げる次第です。



【報告を聞く余英時教授ご夫妻】



【河田学長（右）との記念撮影】



【授与式後の余英時教授（中央）】



第1回国際シンポジウム

## 文化交渉学の可能性を考える——新しい東アジア文化像をめざして

2007年10月4日（木）、5日（金）の両日、関西大学において、「文化交渉学の可能性を考える——新しい東アジア文化像をめざして」と題する国際シンポジウムが開催された。

10月4日には、章開沅（華中師範大学・元学長）、王汎森（中央研究院歴史語言研究所・所長）、フェデリコ・マッシーニ（ローマ大学東方学院・院長）、小島毅（東京大学・准教授）各氏による祝辞、森本靖一郎（関西大学理事長）、渋沢雅英（渋沢栄一記念財団理事長）各氏による挨拶の後、余英時（プリンストン大学名誉教授）氏の名誉博士号授与式、および余英時氏の記念講演が行われ、それに続いて5つの報告があった。同時通訳設備のある特別会議室が満席となる盛況であった。

10月5日は、6人の研究者による研究講演、および「国際文化交渉学会」設立に向けたディスカッションが行われた。研究報告・研究講演については、それぞれ下記のとおりである。

2007年10月4日  
 関西大学100周年記念会館第1特別会議室

### 文化交渉学の方法論構築に向けて —宗教学を参考にして

小田淑子（関西大学・教授）



宗教学の成立と展開を参考に、ディシプリンとしての文化交渉学の方法論が議論された。文化交渉学の研究対象は、外来文化、異文化、新たな文化と旧来の文化との接触、軋轢、文化変容にある。外交史や国際関係論が政治経済に偏向し、文化人類学が無文字文化を扱ってきたのに対して、文化交渉学は歴史に着目しつつ新たな研究分野として展開

する。宗教学はその誕生から学際的な研究分野であった。しかし、宗教学は宗教交渉を主題として扱ってこなかった。宗教の受容と変容など、宗教現象の動態的解明は宗教学にとっても魅力のあるテーマであり、その意味で文化交渉学は宗教学にとっても新たな研究テーマと方法論を提供することができる。そのためには、1)文化接触の様態や類型、2)新旧文化の軋轢や対立の類型、3)異文化受容を測定する要素、4)伝統文化の変容を測定する要素という四点について、暫定的にでも分析枠組みを構築すべきであろう。

### 明朝の後に中国なし —再び17世紀以降の中国・朝鮮・日本の相互認識について

葛兆光（復旦大学文史研究院・院長）

17世紀以降清朝を訪問した朝鮮の使節は、清朝では伝統的な葬送儀礼や社会風俗が崩壊していたことを指摘し、また長崎に到着した中国人に対する尋問記録には、彼らが古き良き中華文化を失っていることが記述されている。つまり朝鮮、日本の両国は清朝にもはやアイデンティティを感じてはいなかったのである。そうした二国の見解をよそに、





清朝ではマテオ・リッチ以降、空想的な天下観に代わる新しい現実的な世界像が知識人にもたらされたにもかかわらず、実際には中華体質から抜け出せないでいた。ここに、東北アジアが本来共有していた漢唐文化を基盤とする文化的アイデンティティが崩壊する。葛氏は以上の歴史的な流れを確認し、今後望まれる新文化共同体としての東アジアを構築するうえで、我々のアイデンティティの基礎を再検討することが必要であると指摘した。

## 神 聖性の内部と外部 —張載による儒教解釈の二つの特性

マイケル・ラックナー (エアランゲン大学中国研究所・所長)



北宋の儒学者張載を取り上げ次のような議論が展開された。張載に代表される北宋の新儒教における議論は、西洋哲学に対置するものというよりは、西洋の神学と関連している。というのも、哲学的な思考方法を追求するだけではなく、どのように經典にアプローチすべきかという解釈学的方法が西洋神学と類似しているからである。しかし、中国的な言説では、神そのものが欠如しており、「神聖さ」はより世俗的な側面を見せる。あるいは、西洋的な上からの神聖性ではなく、世俗性を有した人間が如何に上昇していくかに議論の重点が置かれていた。そうした「神聖性」を構築する過程では、經典の再解釈が重要となり、それが張載の思想遍歴であったのだ。

## 近 世東アジア文化交渉と 中国帆船

松浦 章 (関西大学・教授)



清代における中国帆船が、どのように東アジア諸国間の文化交渉の一端を担っていたかが検討された。報告では清代帆船の漂着史料に着目し、とりわけ朝鮮・日本等で記録された史料の重要性を指摘する。また、明代後期から清代にかけて、実際の中国帆船の活動を、銀の流れに裏付けられた中国-フィリピン貿易等の物流、そして人の往来の中から描き出す。報告に際しては報告者が博搜した各種中国帆船の画像・写真が紹介され、中国帆船の持つ、時代や地域による多様性が示された。

## 吉 田松陰とペリー —開国期文化交渉の再考

陶徳民 (関西大学・ICISリーダー)



吉田松陰らがペリー側に渡した密航嘆願書(「投夷書」と、新たに発見された密航失敗後ペリー側に渡した嘆願書(板切れに書かれた「原本」)に一番近いテキストで、イェール大学古文書館『S. W. ウィリアム家族文書』所蔵。報告者が発見し、「第二の投夷書」と名づけた)に

関する分析がなされた。松陰はその蘭学の師・佐久間象山の示唆からアメリカの軍事力の探索必要性を認識し、1854年春下田密航を企て、ペリーの旗艦に登った。しかし、ペリーは不審者の受入で幕府との信頼関係を壊し、辛うじて結んだ日米和親条約に悪影響を及ぼしかねないという危惧、すなわち国益重視の立場から、松陰の密航を拒否した。しかし、のちに松陰が下田獄で書いた「第二の投夷書」にある英雄的気概や飽くなき好奇心に感動し、その監禁状態の悲惨さに同情を寄せ、人道主義の立場から松陰を極刑に処さないよう幕府に勧告し、了承を取り付けたという交渉の過程を明らかにした。

2007年10月5日  
 関西大学尚文館7階莫章ホール

## 交 流とインターアクション 一東アジアの文化的伝統の再建を論じる

李焯然 (シンガポール国立大学・副教授)



東アジア各国はいずれも漢字文化の影響を受けた、漢字文化圏としての一体性を有したものとして理解できる。中国文化は、常に「華夷に別あり」という認識と「天下一家」的な認識の間で揺れていた。現代に至ると、中国の政治的運動が伝統文化に大きな影響を与えたのに対して、日本や「四小龍」では、経済発展によって伝統文化が保存された。中国の周縁が中心となったと言える。一方、歴史のある中国文化も単一の文化によって成立しているのではなく、仏教を中心とするインド文化、イスラームを中心とするアラブ、ペルシア文化、キリスト教などの西洋文化などが流入した。中国文化は一種の「受容文化」であり、開放性と吸収力を兼ね備えたものである。

## 茶 と中国文化

鄭培凱 (香港城市大学中国文化中心・所長)



茶葉を煮出して飲む中国南方の習慣は唐代以前に遡り、三国時代には茶葉を米で粘着させ茶餅を作り出している。唐代には茶政・茶税及び茶馬貿易が確立され、北方へも飲茶習慣が広まったようだ。宋代には茶の生産は福建へと移り、飲法も点茶などが出現し、茶碗が青磁から黒磁へ移行した。宋から元にかけては、散茶、団茶、茗茶、抹茶、蠟茶など様々な形態が存在している。明代には茶の新製法として炒青や烘法といった焙煎法が出現し、文人たちが茶の飲み方、飲む場、飲むときの精神、茶道具などへのこだわりを綴った茶書を出版するにいたった。

## 東 アジア文化交渉史料の 新しい意義

王汎森 (中央研究院歴史語言研究所・所長)



中国以外の諸国・地域に分布する東アジア文化交渉史料を利用する意義は以下のごとく考えられる。たとえば、13世紀以降の肖像画・水墨画の中日交流から、日本側の受容の取捨選択による影響等が見える。また中国研究でも、清代の満漢の種族意識を理解する上で、タブーに拘

束されない他地域の史料が非常に有用となる。さらに、中国人には当然すぎて記録されない日常生活への観察・記録、地方レベルの文化情報も、他地域の史料には豊富に含まれている。これらのことから、このプロジェクトには中国ですでに失われた佚書・佚文も、東アジア規模でのさらなる発掘が期待されよう。

## 東 アジア近世知識人の一形態

金文京 (京都大学人文科学研究所・所長)



前近代の中国社会、あるいは日本、朝鮮をふくむアジア近世社会を考察するうえでの手掛かりとして「山人」に注目する。山人とは明代末期に顕著にみられる職業的知識人の形態である。本来は医術や占術を職業とする職称であったが、次第に何らかの技術を持ち、都市で活躍する者の呼称となる。この山人と商人、隠者、科挙落第者、寺院などとは密接な関係をもつ。また山人の呼称は朝鮮や日本にも伝わり広く文学者、政治家などに使用されており、山人という存在から中国、東アジアにおける多くの共通現象を考察できるのである。

## 日 本における儒蔵編纂協力の現状

戸川芳郎 (東方学会・理事長)

二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」における『儒蔵』編纂事業を紹介した。『儒蔵』とは仏教の『大蔵経』、道教の『道蔵』に匹敵する大型儒学典籍叢書のことである。北京大学の湯一介教授を編纂責任者とする『儒蔵』編纂センターが『儒蔵』完成を目指している。センターからの依頼を受け、『儒蔵』日本編纂委員会を組織した経緯が説明され、日



本における重要な儒学典籍の選定、テキストデータ化など具体的な編纂事業を詳細に説明された。

## 懐 徳堂の電子情報化

湯浅邦弘 (大阪大学・教授)

江戸時代に大阪商人によってつくられ、学問の一大中心となった懐徳堂についての各種情報を、「WEB懐徳堂」(<http://kaitokudo.jp/index.html>)として電子情報化した事例が紹介された。インターネット上で誰でもアクセスできるデータベースとして構築され、多彩な学術情報と美しいビジュアル情報を織り交ぜた「WEB懐徳堂」は、歴史遺産としての顕彰と豊富な学問知の共有を目指す試みである。東アジア規模での学問知の共有を目指す文化交渉学にとっても、示唆するところの多い実例と言える。





## 活動報告

### 【第2回創生部会】

2007年10月19日（金）、関西大学において第2回創生部会が開催された。創生部会は、プロジェクト全体の研究方向の策定や、新たな共同研究の可能性を探るために行っており、第2回創生部会では5人の報告が行われた。報告内容はそれぞれ以下のとおりである。

#### 内田慶市

#### 「私の文化交渉学 = 文化の翻訳

—言語学の観点から—



内田氏は、言語研究における周縁アプローチと、翻訳文化研究に関して報告を行った。言語研究における周縁アプローチに関する報告では、「官話と方言」や「一般言語学と個別言語学」など、「個別」と「一般」、あるいは「特殊」と「普遍」のインターアクションといった文脈から、「周縁と中心」を再構成していくことの重要性が指摘された。

翻訳文化研究についての報告では、説話の伝播と意味解釈のずれへの着目が指摘された。とくにイソップ説話を入手した日本人にとって、その寓話内容がどのように解釈されたのかが興味深い。

#### 吾妻重二

#### 「東アジアにおける伝統教養の形成と展開

—書院を中心に—

吾妻氏は、中国、朝鮮、ヴェトナム、日本における民間教育施設 = 書院の研究によって、東アジアにおける伝統教養の形成と展開の解明を目的とする共同研究を提議した。東アジアにおける民間教育施設は近世、儒教の影響を受けて発展し、各地域の諸条件によって多様な展開を見せている。



これまでの書院研究は各地域の個別研究に止まっており、東アジアを横断する広角的視野がなかった。東アジア各地域の研究者が、思想、宗教、歴史、文学、言語などの諸分野から伝統教養のありかたを考察し、東アジアの文化的基盤や、今なお伝承される知的伝統の共通性と差異を明らかにすることの重要性が指摘された。日本に関しては、大阪の漢学塾である泊園書院が所蔵する貴重書を調査しデータベース化する。

#### 原田正俊

#### 「日本仏教史研究と文化交渉学」

原田氏の報告では、日本仏教史研究の成果と現況についての概括と、仏教史を文化交渉学のテーマとして扱う際の研究課題が提起された。日本仏教史は仏教自体が大

陸から伝来したという特性のもと、研究史上においても人と情報の往来が常に問題とされてきた。しかし古代・中世・鎌倉新仏教いずれも、関心の中心は日本仏教の内在的な発展の解明にあり、近年大陸仏教の影響を重視する研究が現れ始めたとはいえ、東アジアの動向と日本社会の運動との解明は遅れている。東アジア各地域の仏教儀礼・仏事法会の果たした役割の比較研究は、十分に研究が進められておらず、「東アジアにおける仏教儀礼の展開」が共同研究テーマとして提起された。儒教儀礼研究のプロジェクトや仏教儀礼研究、道教や神道研究など、東アジアにおける思想・宗教およびその儀礼の全体像をより明確にすることを目標とする。



### 野間晴雄

#### 『異邦人のみた東アジア』

—イメージ・景観・システムと文化交渉学—

最後に野間氏からは、東アジア(中国、朝鮮、台湾、ヴェトナム)を訪れた近隣の異邦人(隣接諸国)と遠方の異邦人(西洋人など)が、著作などに残した東アジアをみるまなざしについての報告がなされた。それらのまなざしを比較し、彼らが博物学的関心から実践・産業的関心へ展開するさまを、データベース構築を通じて明らかにする。さらに、近代以降、アジアで収集された稀種・有用植物の植物園での分類・保管システムを分析することにより、本草学や民俗分類との違い、さらには収集者のまなざしを明らかにする。同時に、中国における外来栽培植物(サツマイモ、トウモロコシなど)の語彙や普及過程、日本や琉球の菊やユリをめぐるまなざし、伝統産業の国際化などに共同研究の可能性を想定している。また、次年度以降に予定されているフィールド調査をヴェトナムの都市に設定して、統一テーマのもとで学際的に調査し、モノグラフの出版を目標にすることが提起された。



### 沈国威

#### 「近代のキーワードから見る漢字文化圏の語彙交流」



沈氏の報告は、「民主」「自由」など近代社会のキーコンセプトを表す漢字語の多くが日本・中国で造語され、その後漢字文化圏の各国・地域で共有されたことに着目している。同形語の発生・交流・伝播・受容・変容の各国・地域での展開を明らかにするには、「語」の現状を個別に記述するだけでは不十分である。

日・中・韓の各言語における関係性を重視しつつ、語彙史上の「語」の発生と、アジアの西洋化における新概念の獲得・変容という視点からの検討が必要となる。中国・香港・韓国等の研究者との共同研究が進行中で、これがアジアの近代化プロセスを検証する上で不可欠の基盤研究となると同時に、今後の異文化研究、及びそれに伴う概念の移動、外来新概念の語彙化のあり方等についても有益な示唆を与えるに違いない。

#### 【第3回創生部会】

2007年11月16日(金)には、第3回創生部会が開催された。第3回創生部会においては、3人の報告者による報告が行われた。それぞれ、次のとおりである。

### 二階堂善弘

#### 「東アジア宗教研究における新視点の模索」

東アジア地域の文化交渉の最も特徴的事例である仏教については、文化交流的な視点が研究史上敬遠されてきた。道教の宗教実践がもつ複雑性も研究上忌避されてきた。現



在の中華圏においては、両者は「中華教」とも呼ぶべき混合宗教となって信仰されており、こうした現象を適確に捉えるには従来の研究姿勢では不十分である。近年、仏教・道教研究において文化交流を主軸に据えた研究が現れ始めている。研究アプローチの変化は現に起きつつあり、東アジア宗教研究における新たな方向性を見出すことができる。本報告では、とくに「顕微鏡的」研究と「望遠鏡的」研究とのバランスをいかに保つかという点や、文化交渉学専攻における研究教育の在り方にまで言及された。

## 陶徳民

### 「キー・ドキュメントを発掘し、キー・ワードを見つけ出す—明治日本における文化交渉の再検討」

本報告は、研究成果を効果的に発信する上で、キー・ドキュメントとキー・ワードのもっている重要性を、実例で示すことを主眼とする。取り上げた主な実例は、エール大学古文書館で発見した、下田密航を断られた吉田松陰がペリー側に出した嘆願書（「第二の投夷書」と名づけた）である。そこに記された松陰らの英雄的気概や監禁実態が、ペリーらの同情を呼び寄せ、幕府側に極刑をしないよう要請する行動に向かわせたという従来看過された記述を、『ペリー提督日本遠征記』から見出し、



国益が優先か、それとも人道配慮が優先かという選択に揺れているアメリカ外交の一貫したジレンマを読み取った。この他、井上哲次郎が中村正直の『敬字文集』に書いた批判的欄外書や、1912年に内藤湖南が奉天調査時の筆談記録に記した熊希齡への思い遣りの文言も取り上げられた。また、

関西大学の学術資源や研究蓄積を十分に活用すること、構成員全員の業績と興味を最大公約数的に集約することなどが提案され、具体的には東アジアの書院研究、近代的東洋学の学術遺産、長崎・対馬・薩摩＝琉球などを窓口とする近世対外経済文化交渉史という3本の柱が提案された。

## 西村昌也

### 「フエ都城周辺域の学際研究の可能性／ヴェトナムと周辺域を中心とする考古学あるいは物質文化研究からみた文化接触・文化伝播・文化交渉」

前半ではフエ都城周辺域を事例に、グローバルCOEプログラムでのフィールド調査の可能性が提示された。後半では、ヴェトナムと周辺地域で、考古学・物質文化から文化の接触・伝播・交渉などを考えるテーマや枠組みが提示された。銅鼓は南中国や東南アジアで2000年以上の利用史を持ち、時代とともに様々な方向へ伝播・変容する儀器である。類似した脈略で使用されることもある銅鑼は、南中国から東南アジアで発達し、日本・朝鮮まで伝わった楽器で、起源・伝播・変容・使用脈略の比較研究が望まれる。14～16世紀の東南アジア産陶器等の出土資料は、東シナ海や東南アジア交易のルートなどを解明するきっかけとなる。また、文化の変容や交渉を理解するために、都城遺跡や墓制などをヴェトナム、広西、雲南などで比較調査する必要がある。さらに、東南アジアにおける中国化やインド化の過程を、パターンとして解明することで、ディシプリンの構築が可能となると指摘した。



## グローバル COE 「関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS)」 紀要原稿募集のお知らせ

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、紀要『東アジア文化交渉研究』(Journal of East Asian Cultural Interaction Studies) の原稿を、下記の要領で募集しております。

### (1)原稿

東アジアの文化交渉にかかわる論考、研究ノート、その他

### (2)使用言語

日本語：20,000字程度

中国語：12,000字程度

英語：4,000語程度

### (3)注意事項

(a)英語による要旨を、150語程度で添付してください。

(b)提出はワード文書でお願いいたします。

(c)注は脚注方式でお願いいたします。

(d)文献についても参照文献リストは付けず、脚注に収めてください。

(e)図表がある場合にも、なるべく上記字数に収めてください。

### (4)提出締切り等、詳しくは下記の連絡先にお問い合わせください。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
関西大学文化交渉学教育研究拠点  
『東アジア文化交渉研究』編集委員会  
e-mail : icis@jm.kansai-u.ac.jp

## 編集後記

「文化」とは残余のカテゴリーではなかろうか。経済や政治の動きは、経済学や政治学などのディシプリンによって研究される。しかし、私たちの経済活動や政治運動の大部分は、これらのディシプリンによっては解明しようのない「何か」によって突き動かされている。この解明しようのない「何か」、残余のカテゴリーとしてしかいいようのない「何か」こそが「文化」なのではないか。その意味で文化交渉学における「文化」の分析は、世界の動きを経済や政治の用語に矮小化する今日の文化理解に抵抗するものとなる。そのためには、既存の学問領域を超えた地点に、「文化」に対する深い洞察を見出す必要があるのだろう。

さて、本誌のタイトルは「reflection」である。少なくとも私たちは、それに三つの意味を込めたい。その三つとは、新たな領野を開拓するための、既存の学問領域に対する内省(reflection)、「文化」を生きる私たち自身の今日的課題に関係付けられる再帰性(reflexivity)、そして今日の文化をめぐる課題が照射(reflect)される場としてのreflectionである。

本号では、2007年11月末までの活動を報告した。本号で紹介した活動以降も、第4回、第5回、第6回創生部会が開催されており、また2008年1月26日には、「東アジアにおける書院研究」と題する第1回研究会が開かれた。それらの内容については、次号以降で順次紹介したい。

(担当：木村)

## 表紙写真について

### (文武廟の天井につり下げられた線香)

中国がまだ外国人研究者に開放されていなかったころ、多くの人類学者が香港でフィールドワークを行った。当時の人類学者にとって香港は、英国の植民地として「本当の中国」文化を喪失しつつある地域と認識されており、「本当の中国」で調査が可能になるまでの一時的代替物でしかなかった。ところが香港文化自身にとっては、中国文明と西洋文明との境界線上に位置づけられたことが大きな意味をもった。両文明のいずれからも周縁に位置づけられてきた香港は、その周縁性のゆえにこそ世界の経済的中心の一つとして発展し、豊かな文化を育むことになった。1840年代に建立された文武廟は、そうした香港の植民地の歴史とともに歩んできた。香港島荷李活道(ハリウッド・ロード)の高層ビル群の谷間にある文武廟では、釣鐘状の線香が天井からいくつも吊り下げられている。立ち込める線香の煙が、廟内に差し込む陽光に照らされて、幻想的な雰囲気醸し出している。





# Reflection 1

ICIS Newsletter, Kansai University

発行日…2008年(平成20年)1月31日  
発行…関西大学文化交渉学教育研究拠点

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 / TEL 06-6368-0266

E-Mail [icis@jmkansai-u.ac.jp](mailto:icis@jmkansai-u.ac.jp) / URL <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>

関西大学文化交渉学教育研究拠点



# ICIS